

## 愛媛県内子町における「農村的おもてなし空間」の創出と運営

1970年代以降のまちづくりを通じた行政関与に着目して

Creation and operation of "rural OMOTENASHI space" in Uchiko Town, Ehime :

Focusing on Local Government through town development since the 1970s

37-176130 岡山紘明

In present-day Japan, where dramatical societal changes have taken place in, a spirit of serving customers that is uniquely called "Omotenashi" is fading away. However, it can still be seen in rural areas compared to cities, especially Uchiko Town, Ehime Prefecture. Led by the local governments, the town has been focusing on creating spaces for "Omotenashi" since the 1970s, against the trend of the society. This paper captures the whole picture of the creation and management of the spaces for "Omotenashi" in the rural side of Uchiko Town for about half a century.

### 1章 研究背景

#### 1-1. 問題意識

1945年以降、日本で資本主義社会を推し進める過程で地方から都会へ人口が流出し、現在も続いている。農村部に広がっていた美しい農村風景は日に日に荒れ、空間を作り出す人も管理する担い手も減り日本の文化は薄れつつある。

#### 1-2. 「農村的おもてなし空間」の定義

「おもてなし」という言葉は接客業や立ち振る舞いに言及するが、歴史性や振る舞いを行う空間、周辺環境、それらの計画・運営も含めて捉えたものを本論では「おもてなし空間」と呼ぶ。

「おもてなし空間」は人的・時間的・學習的・金銭的にも膨大なエネルギーを必要とし現代社会で実現するには、かつての封建制の庄屋的なポジションを有する地方自治体の役割が大きいと捉える。おもてなし空間の中でも農村部におもてなしに基づいたコミュニティがあり、都市部よりもおもてなしの質が高いと考える。農村部でのおもてなし空間を「農村的おもてなし空間」と定義する。

#### 対象地の選定「愛媛県内子町」

重要伝統的建造物群保存地区を「おもてなし空間」と捉える。中でも農村部の影響が大きい「在郷町」「山村集落」「宿場町」でかつ認定から30年経過した11地区を選んだ。特に認定地域外の拡大や他分野への展開が大きく現れている愛媛県喜多郡内子町を対象地として、内子町の農村的おもてなし空間を調査する。



愛媛県内子町 八日市護国重伝建地区

#### 1-3. 研究の概要

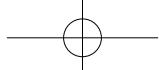
##### 研究の目的

本研究は戦後から高度経済成長、バブルを通して荒廃してきた農村のおもてなし文化を、約半世紀、意図的に残す方針を立て、空間づくりの点で地方自治体が主導となって、実行してきた愛媛県内子町を対象にする。「農村的おもてなし空間」を主軸に約半世紀に及ぶ内子のまちづくりの全体史と各おもてなし空間の創造と運営に関する住民と行政の関与を明らかにしていく。

##### 研究の構成

1章で研究背景を示し、2章で対象地内子町の1970年以降のまちづくりの全容を「農村的おもてなし空間」の観点から明らかにする。3章では特徴的な「農村的おもてなし空間」を10箇所取り上げ、出来上がるまでの「創造」と「運営」に分けて調査する。4章では2・3章のおもてなし空間の分析を行い研究をまとめる。

Hiroaki Okayama



## 2章 研究内容1 「内子の農村のおもてなし空間を主としたまちづくりの取り組み」

対象地愛媛県内子町は歴史的な町並み保存を四国で初めて行った地域として知られる。歴史的空間の保全以外にも農村集落の景観を基軸とした住民運動「村並み保存運動」、全国のモデル道の駅にも認定された「内子フレッシュパークからり」照葉樹林の植林活動など、他分野にわたり、農村部の暮らしを維持するための方策を仕掛けている地域である。

### 内子町における農村のおもてなし空間の略年史

#### まちづくり初動期（1975-1982年）

##### 町並み保存 初動期

- 1975年 - 視察研修（妻籠、高山など）
- 1975年 - 制度、体制の確立
- 1975年 - メディアへの露出
- 1980年 - 拠点「上芳我邸」運用開始

#### まちづくり拡大期（1982-2000年）

##### 町並み保存 拡大期（1982-2000年）

- 1985年 - 芝居小屋「内子座」の復元
  - 1996年 - 文化交流ヴィラ高橋邸の活用
  - 1996年 - 道の駅「からり」の開始
- 村並み保存 前期（1989-2000年）
- 1989年 - 「石畳を思う会」発足
  - 1992年 - 水車小屋の完成、水車祭りの開催
  - 1994年 - 農家民宿「石畳の宿」オープン
  - 1996年 - 第1回スイス研修

##### エコロジータウン内子（1982-2000年）

- 1983年 - ローテンブルク市長招聘の国際シンポジウム開催
- 1989年 - 近自然工法の川づくり
- 1992年 - 照葉の森づくり調査開始

#### 近年の動き（2000-2021年）

- 町並み保存（2000-2021年）
- 2000年 - 町並み保存センター開設
  - 2003年 - 本芳我邸着工（平成の大修理スタート）

##### 村並み保存（2000-2021年）

- 2003年 - 石畳東地区桜まつりを開催
- 2005年 - 第2回スイス研修
- 2009年 - そば屋「そば処石畳むら」オープン

内子町のまちづくり全体史(1975-2021年)

#### 2-1. 「まちづくり初動期」

##### 町並み保存前期（1975年-1982年）

###### <町並み保存運動 0.社会背景とキーマン>

1970年ごろ全国の田舎で人口減少が著しくなっている状況で山奥の宿場町「妻籠」が観光で人を集め、まちづくりを推し進めていた。内子町役場の岡田文淑氏を中心に内子のまちづくりを「観光」を軸に推し進めることになる。

#### <町並み保存運動 1.住民意識と拠点づくり>

内子のまちづくりは1975年から始まった「町並み保存運動」から始まる。まずははじめに地域住民や行政や議員の関係者を妻籠や高山といった歴史観光の先進地に連れて行った。またマスコミをうまく利用し機運を高めた。初めの2,3棟の修理工事が始まると徐々に高まり始めた。のちに重要文化財となる上芳我邸を1980年より賃貸契約し、住民の会議場所として利用した。2年間の仕込みの末、喫茶スペースとして運用。ピーク時で年間3万人が訪れる人気スポットとなつた。

#### <町並み保存運動 2.体制・制度づくり>

住民運動の中にも行政の下支えが必要となる。1975年に「商工観光係」を作り町並み保存の事務局とした。1977年に「内子町八日市周辺町並み保存対策協議会」設置し、広島大学の鈴木充先生に依頼し、伝建地区調査を進めた。1982年に選定される。また電柱は地中化をせず、家先の後ろに持ってくることとした。

#### 2-2. 「まちづくり展開期」（1983年-2000年）

まちづくり展開期は分野に幅が広がるため、便宜上、「市街地での拡がり」と「村並み保存」の二つに分類する。

##### 2-2-1. 市街地での拡がり

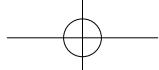
###### 内子座の復元

1982年に商工会の倉庫となっていた芝居小屋「内子座」に着手する。商工会から買い上げ、建築基準法や愛媛県庁と交渉しながら文化ホールとして修理工事を完成させる。日本で数少ない木造の芝居小屋シンポジウムや歌舞伎・文楽など伝統芸能の舞台となっている。



町民のシンボル芝居小屋「内子座」

###### 道の駅「からり」の開始



1996年「道の駅内子フレッシュパークからり」がオープンする。敷地は国道からも近く、美しい川沿いで遊ぶことのできる元製材所の民地を取得した。生産者組合を作る前に「内の子市場」と呼ばれる



道の駅内子フレッシュパークからり

#### 国際的なシンポジウムの開催

1982年の『内子町振興計画』にて、内子の方針の一つにコンベンションタウンが加えられた。学術的な全国、世界でも第一線の考え方を内子の街に取り入れていくまちづくりだ。内子では1985年の町並みをテーマとしたシンポジウムでは世界で一番美しい町と評されたローテンブルク市市長を招聘した。1986年にもスイス人技師を招聘した川のシンポジウムを隣町旧五十崎町と協同で開催。森づくりのシンポジウムには晩年ヨーロッパで評される宮脇昭を中心としたシンポジウムも行われた。

#### 2-2-2 「村並み保存」前期（1983-2000年）

##### < 村並み保存 0.背景と概念 >

「町並み保存」の中で美しい風景を人の手で作っていく経験を培った内子町。特に担当者だった岡田は市街地での活動の中で「山間部の村が疲弊していくには町は活性化しない」と感じ、自然環境を活かし、人の手で作った「村」を美しい景色を軸として村づくりを「村並み保存」と名付け、推し進めていく。

##### < 村並み保存 1.初動と選定地 >

1983年、村並み保存はモデル地域の選定から始まった。旧内子町を代表する3河川のうち、唯一源流域が町内にあった「麓川」の源流の村「石畠地区」で活動を始めることになる。住民と日常会話を重ね、地元のリーダーとなりうる人と出会い、リーダーの人脈で10名を集め、1989年に「石畠を思う会」を発足する。構想から実に

6年で一つのサークルが発足したことになる。

##### < 村並み保存 2.行動と実績 >

沿道に樹木や花を植えるところから始まり、水車小屋づくりを機に本格化する。1990年に水車小屋が完成した。費用の60万円は1人5万円を出し合って作ることになった。人件費は自分達の労働で賄い、山奥の水車小屋のユニークな活動が全国放送にもなる。1992水車祭りを開催しピーク時には2,000人を集め、140万円の売り上げに及んだ。1994年には農家民宿を「石畠の宿」を創業し、全国のグリーンツーリズムの先駆け的な存在となり、客室4室で年間売上1,500万円を超えた。活動当初450名いた人口は減っていたが、知名度や観光資源といった地域の魅力は向上していた。



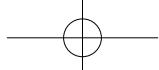
石畠清流園

#### 2-2-3. エコロジータウン内子

1993年の総合計画の表題として用いた「エコロジータウンうちこ」とは、1975年からの「町並み保存」、1989年からの「村並み保存」を通して、内子町の方向性を、「環境を中心に据えたまちづくり」としたキャッチフレーズである。実現に向けたプロジェクトの中でも特徴的な「照葉の森づくり」「近自然広報の川づくり」の2つの事例を取り上げる。

##### < 照葉の森づくり >

宮脇昭氏は戦後、拡大造林等で荒れた日本の森を西日本中心に広がる植生「照葉樹」を基軸として自然林に戻す活動を行なっていた。愛媛県にも取り入れたいと、内子で宮脇氏を招聘して1992年の植生調査、1993年のシンポジウム、同年から2000年ごろまで続いた植林イベントを通して住民が参加しながら照葉樹を町内に広げていった。また「町並み駐車場」や「文化交流ヴィラ高橋邸」「道の駅からり」などの公共施設には緑化ブロックや植栽といった緑地を設け景



観的、防災的な役割も果たしている。



擁壁に照葉樹を植樹する作業風景

#### <近自然工法の川づくり>

都市部の人口増加に伴い、河川を直線的かつ3面コンクリートで覆う方式が一般的となっていた。自然環境に配慮した河川工事を日本で先駆的に行なっていた福留修文が主催する「西日本科学技術研究所」とともに麓川流域での川づくりを開始する。綿密な調査のもと流量や河川の周辺の植生もこだわり、水の方向が蛇行し、木が川面に覆いかぶさるような河川改修を地元業者とともに行った。地元業者の中に「石畳を思う会」のメンバーがいたことも大きく動いた。近自然工法の河川改修の実施例がいくつか見られ、「麓川」はホタルの見える川が3km以上続く川に再生している。



川を意図的に蛇行させる「ナゲ」の作業風景

#### 2-3.近年の動向（2001年-2021年）

##### 2-3-1 町並み保存 成熟期

2000年に町並み保存センターを開設し、行政事務を保存地区内に入れる初めての自治体となった。町並みにある重要文化財3棟の大修理が行われた。2013年には商店街沿いでは元警察署を観光案内所「内子ビジターセンター」として整

備した。が開設した。2015年に内子座を重要文化財化した。

##### 2-3-2 町並み保存 展開期

2000年以降、「町並み保存」は継続と進展と衰退を孕んでいる。2003年以降桜まつりを開催。2009より蕎麦屋「そば処石畠むら」が開業。そば祭りも毎年開催。他にもパン屋やブランド栗など観光資源が徐々に増えている。一方で人口減少は進み、耕作放棄地も増えている。

##### 2-3-3 内子町全体

景観法や歴史まちづくり法の形成に伴い、景観行政団体や歴まち計画の策定を行なっている。伝建地区の業務等も継続しているものが多い。2005年市町村合併後は旧内子町内のまちづくりの動きが旧五十崎町、旧小田町に反映されたとは言い難い。現状のまちづくりの課題に対しての新たな方策が立ちにくい状態となっている。

### 3章 各農村のおもてなし空間の創造と運営

2章のまちづくりの全体像の中でも「農村のおもてなし空間」として取り上げる空間は①行政と民間が創造・運営に関与している点、②2005年の合併以内の計画内で位置づけられている事業に限定して選び、10の空間を研究対象とする。

##### 3-1 空間の捉え方

各おもてなし空間の調査項目は1章で述べた「農村のおもてなし空間」の定義をもとにする。各空間に対して関係者や計画者図面資料などを調査する。

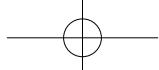
##### 3-2 各おもてなし空間のつくり方と運営

梗概では一例として「上芳我邸」の全体を紹介する。



取り上げる「おもてなし空間」10箇所の位置

##### <3-2-1.木蝋資料館 上芳我邸>



上芳我邸は 1894 年に創建された住居兼製蠅所で、1980 年から賃貸契約で内子町役場が郷土資料館兼喫茶店として運営している。重要文化財を家屋と木蠅の製蠅用具の 2 つ有する。



上芳我邸主屋前面

#### ① おもてなし空間の創造

1975 年から町並み保存運動を開始し、内子の目指したのは妻籠（南木曽町）の町並みだった。宿場町妻籠の町並みの中心施設は「脇本陣奥谷家」があり、郷土資料館と、明治期の脇本陣の建築空間を保存している拠点だった。内子の町並みにも同じような拠点を作りたく、当時空き家となっていた、かつての内子の最盛期を支えた木蠅生産の拠点「上芳我邸」を賃貸契約し拠点を整備する。当時愛媛出身だった奈良女子大学で民俗学を専攻していた学生を学芸員として雇い、屋敷内の民具の整理から始める。また 1 階の広間空間は町並み保存会の打ち合わせや会議室として利用することになる。また当時、町並み保存地区には飲食店がなく、上芳我邸の中に喫茶をオープンする運びとなる。2 年前からコーヒーの淹れ方講習や準備期間を設け開店した。

#### ② おもてなし空間の運営

喫茶はオープンから人気を博し、年間 3 万人の来場者を迎える施設となった。木蠅資料も続々と集まり、重要有形民俗文化財となった。秋の観月会の会場としても利用された。また庭の手入れは地元の庭師に委託し、伝統技術の継承を内子町の予算で賄っている。重要文化財の修理工事にも専門家の立ち合いのもと、地元業者などが関わりながら、修繕を行なっている。当初の木造 3 階の喫茶店は建築基準法上、違法であったことが判明し、離れた 2 階に移動した。近年は平成の大修理を行い、入場料やガイドの見直しが図られた。また喫茶も耐震基準を満たし

ていないことから離れから蔵へと移転した。喫茶の人気は下がり、来場者数も年々低下している。

#### 年表

1980	上芳我邸賃借契約
1981	資料館・上芳我邸の設置及び管理に関する条例制定
1982	住居学の研究者を常駐させ、資料研究と来訪者への対応
1983	喫茶営業のために準備を始める
1984	木蠅資料館「上芳我邸」喫茶営業を開始
1985	木蠅資料館「上芳我邸において芳我正之助遺作展を開催
1987	日本の町並み写真展
1987	第1回上芳我邸親月会（以降、毎年）
1990	文化財保護審議会が本芳我家、上芳我家、大村家を重要文化財に指定するよう答申
1990	文化庁より重要文化財の指定
1991	内子及び周辺地域の精蠅用具 1444 点が重要有形民俗文化財に指定される

上芳我邸 年表（1980 年 -）

## 4 研究のまとめ

### 4-1. 研究内容の分析

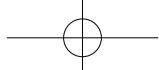
おもてなし空間の分析は 4 つの観点から行った。  
①空間の質と環境配慮の観点から「空間の分析」  
②空間を作る前の学習の計画と専門性の導入をみた「創造の分析」③運営形態やその継続性を「運営の分析」④「行政関与」についてまとめた。

### 4-1-1. 2 章のまとめ

1975 年以降の内子のまちづくりのプロセスは行政と住民が抱える課題を大きく捉えた上で、「町並み保存」「村並み保存」といった方針を見出した。そして住民主体を原則に住民を巻き込み、メディアを巻き込み、近隣の市町村を巻き込んでいった。住民らの説得には説得材料の収集に大学教授ら学術期間から情報を集め、構想を練り上げた。住民とは日常会話から関係性を築き、仕入れた学術的知識を伝えた。地域住民との関係性には、頻度や期間を含め、多くの時間を割いた。運動を下支えする制度の制定や、機運を高めるシンポジウムやイベント、視察の企画を行政的役割が重要であったこともわかる。住民運動に金銭的スケールの広がりといった質を与え、電柱のセットバックや独自の条例整備など風景の質を高める要因となった。大学教授から専門知識を取り入れながら行政手続きを行い、民間人と交渉していく。民間で働きながらできる領域を通り越した行政マン岡田氏の立場ならではの動きだったといえる。退職後の 2000 年以降の動きは鈍化していると捉えることができる。しかし、石畳や町並み保存地区など創り上げた空間や住民運動が残り、魅力を磨いていく地域もある。

### 4-1-2. 3 章のまとめ

行政が関与した 10 の「農村のおもてなし空間」



はそれぞれの時代背景やテーマに基づき創造と運営の工夫を凝らして空間づくりが官民連携で行われてきた。特に「上芳我邸」「内子座」といった重要文化財や「石畳清流園」「内子フレッシュパークからり」といった大臣賞を見るような空間もあり、質の高い農村のおもてなしができる拠点がいくつもある。彼らの運営 2000 年以降鉛化しているともいえ、特に接客や専門家の未介入など運営する人材の意識の変化や専門知識の不足が明るみに出ている。今後も質の高い空間を維持するためには運営管理の中にも日常から専門家の知識が介入する環境づくりが急務と言える。

### 2章と3章のまとめ

2章、3章より 2000 年以降の内子のまちづくりは鉛化しているともいえる。その原因として、行政側の人材不足が大きい。住民運動を起こす能力のある職員の欠如が挙げられる。質の高いお客さまをおもてなしできる空間を作るには経済的、制度的、時間的な観点から行政関与が不可欠であり、職員がキーパーソンになる必要がある。また 2005 年に合併した旧五十崎町、旧小田町に旧内子のまちづくりの経緯や経験値が伝えられていない点も大きい。今後の内子のまちづくりは行政職員が内子のこれまでのまちづくりの経緯を理解し、行政マンとしての奮起ができるかにかかっているとも言える。

### 4-2.研究の評価と課題

内子の農村的おもてなし空間の分析表

no	名称	空間の分析		創造の分析		運営の分析		行政関与	
		空間の質	環境配慮	学習と計画	専門性	運営形態	継続性	計画段階の行政関与	運営段階の行政関与
1	上芳我邸	5	2	2	3	2	5	-	5
2	町並み保存センター	3	2	3	3	2	5	-	5
3	内子座	5	2	4	3	3	5	-	4
4	文化交流ヴィラ高橋邸	3	2	4	2	4	3	-	3
5	商いと暮らし博物館	3	2	1	1	2	5	-	5
6	内子自治センター	1	1	5	4	2	5	-	4
7	内子フレッシュパークからり	2	1	5	4	5	4	-	2
8	内子の森づくり事業	1	3	5	4	1	5	-	5
9	石畳清流園	4	2	4	2	1	2	-	1
10	石畳の宿	4	2	5	4	6	1	-	2

町並み保存初期

町並み保存拡大期

町並み波及

村並み保存

10箇所の農村的おもてなし空間の評価